

イスラエルのあらゆる知性から冷笑されていたアレクサンドリア「驢馬大隊」こそは、イギリス政府の門戸を私のために開いてくれた部隊であった。ペテルブルクの外務大臣は駐ロンドンのロシア大使、ベンケンドルフ公爵に宛て軍団について書き、ロシア大使館はイギリス外務省に、軍団について報告した。大使館の主席参事官を務め後に駐英大使となった故コンスタンティン・ナボコフ氏は、私のためにイギリスの閣僚たちとの会見をとりもってくれた。²³

バルフォア宣言と対ボルシェヴィキ闘争

戦争が終わってみるとユダヤ人もシオニズム運動も全く新しい世界の中にいた。世界シオニスト機構の工作は十分に成功した。もっとも、これはあくまでシオニストにとつての成功であつて、ユダヤ人全体としての成功を意味したわけではなかつた。バルフォア宣言は、イギリス政府がアメリカ・ユダヤ人をして合衆国参戦への影響力を行使させ、連合国へのロシア・ユダヤ人の忠誠を維持させるためすんで支払うに値した代価であつた。しかしシオニズム運動にイギリス帝国からの政治的軍事的支援の契機を与えたバルフォア宣言も、ユダヤ人の心臓部たる旧ロシア帝国の事態のなりゆきを寸毫たりとも変えるような影響力はもちえなかつた。原理的にシオニズム運動と相反するイデオロギーをもったボルシェヴィキが、すでにペテルブルクで権力を握っていたからである。ボルシェヴィキは、英米仏日から資金援助を受けた白衛軍ツァーリ信奉者やウクライナ・ポーランド・バルト諸国軍の挑戦を受けつつあつた。この反革命勢力は反セム主義的行動やポグロムの長年の伝統をもつ多くの分子から構成されていた。こうした反セム主義行動やポグロムは内戦の間も続けられ、さらに拡大されさえした。この間に少なくとも六万名ものユダヤ人

が反ボルシェヴィキ勢力によつて殺害された。バルフォア宣言は、またシオニズム運動に対しては、ポグロム遂行者たる白衛軍というパトロン、の、気乗り薄な支持を付与したが、ポグロムをおさえることも一切しなかつた。せいぜいのところ宣言は世界シオニスト機構に対し民族的郷土をパレスティナに建設するのを認める、ひとつの曖昧な保証にすぎなかつた。かかる公約の中身はなお全く不確定のものであつた。世界シオニスト機構のリーダーたちからすれば、イギリス政府がボルシェヴィキの粉砕を最優先事項とみなしていたということ、またとるに足りないパレスティナという見地からだけでなく、自らの活動の舞台が火薬樽の東欧であつたという点でも、自分たちが神妙にしていなければならないということは分かつていた。

西欧の歴史家はボルシェヴィキ革命をロシア革命と呼んでいるが、ボルシェヴィキ自身は、それで世界大の反乱を起こしたとみなしていた。英仏米の資本家も事態をボルシェヴィキ同様に見ていた。これらの国々の資本家はロシア共産党の成功が自国労働者階級の左翼に息を吹き込んでいると見ていたのである。大衆が反乱を起こすには正当な理由があるという事実を認めることのできないあらゆる社会階級同様、資本家たちは国民に対してのみならず彼らにも向けられた大動乱を、陰謀、それもユダヤ人の陰謀という枠組みで説明しようとした。当時は陸軍大臣だつたウインストン・チャーチルも、写真豊富な『イラストレイティッド・サンデー・ヘラルド』紙（一九二〇年二月八日付）で、「トロツキー……および世界大の共産主義国家という彼の構想は、ユダヤ人の支配下にある」と語っている。ところがチャーチルにはボルシェヴィキと対抗する存在として彼の眼鏡にかなうシオニストがいた。彼は「トロツキーが、シオニスト全体を攻撃し、なかならずヴァイツマンをこれまで攻撃してきた激しさがどんなものか」を見よと熱心に語っている。「トロツキーは……直接このシオニズムという新しい理念によつて寝首をかかれ邪魔された。今始

まっているシオニスト・ユダヤ人とボルシェヴィキ・ユダヤ人の闘争は、ユダヤ民族の心をどちらが獲得できるかという闘いに等しい」とチャーチルは明言していた。⁽²⁴⁾

「トロツキー」に象徴されたボルシェヴィキに対して反セム主義者とシオニストの双方を利用するといふイギリスの戦略は、イギリスが、ポグロムを辞さぬロシア白衛軍と関係をもつていても、最終的には、イギリスにすすんで協力するというシオニスト側の態度にかかっていた。世界シオニスト機構は東欧でのポグロムを望んでいなかったが、この地域で一種包囲された状態にあるユダヤ人のために、世界のユダヤ人を動かすようなことは何もしなかった。シオニストが状況をどう見ていたかは、ヴァイツマンの回顧録だけでなく、彼の当時の各種声明の中にも窺える。ヴァイツマンは一九一九年二月二三日、ヴェルサイユ会議に出席している。そこで彼は一度反セム主義者とシオニストの双方に共有されている伝統的なユダヤ人路線を表明した。実際にユダヤ人が諸問題をかかえているのではなく、ユダヤ人という存在こそが問題だとしたのである。

ユダヤ人およびユダヤ教は、自らと他の諸国民に対して解決困難な問題を現出させることによって、おそろしく弱い条件の下におかれた。ユダヤ人問題は、ユダヤ民族が故国をもたないという点をめぐるものだったから、およそ解決の展望は存在しなかった、もし民族的郷土の創出がないならば、と私は述べた。⁽²⁵⁾

もちろんユダヤ人は諸国民や自らに対して実際問題をひきおこしたのではない。むしろヴァイツマンが存在しない「問題」に「解答」を用意した。結束した資本家権力に対して再度シオニズムは反革命運動として登場した。「シオニズム運動はユダヤ人のエネルギーを、破壊的傾向に消散させてしまうことなく、建設的な力に変えるであろう」と期待されたのである。⁽²⁶⁾ ヴァイツマンは晩年になっても、ロシア革命期のユダヤ人の悲劇を依然シオニズムの目標という眼鏡をかけて見ることしかできなかった。

バルフォア宣言からボルシェヴィキの権力掌握にいたるまでの間にロシア・ユダヤ人は当時で三千万ルーブルという多額の金をパレスティナ農業銀行に出資していたが、これはほかの多くのものとともに帳消しにならざるをえなかった。……独立して戦われたロシア・ポーランド戦争において、ポーランド・ユダヤ人はなお大変な惨害に遭ったので、我々の目前に与えられた課題に対して格別言及に値するような貢献をなしえなかった。⁽²⁷⁾

ヴァイツマンはあらゆる点でシオニズムがパレスティナではまだほんの足掛りをつかんだにすぎぬ弱体な運動とみなしていた。「東ヨーロッパは、当時シオニズム運動が解放しうる力をもつていなかった分、またそれだけ悲惨であった」⁽²⁸⁾。もつとも、ほかのさまざまな運動がそれほど不活発であったというわけではない。イギリスの労働組合は、白衛軍への武器を運搬する船の出入港禁止運動を組織していた。フランス共産党はフランスの黒海艦隊で反乱を起こした。そしてもちろんのことながら白衛軍による殺人作戦からユダヤ人を護ろうとつとめたのは赤軍であった。しかし世界シオニスト機構は戦闘的な組合員を支援するためにイギリス・ユダヤ教徒共同体レベルでもまた権力の中核においても自らの影響力を行使しなかった。ヴァイツマンは、イギリスのシオニスト後援者たちの反共メンタリティを完全に共有していた。彼はこの時代の見方をけつしてその後も変えなかった。晩年の回顧録『試行錯誤』においてもなお、「すべ